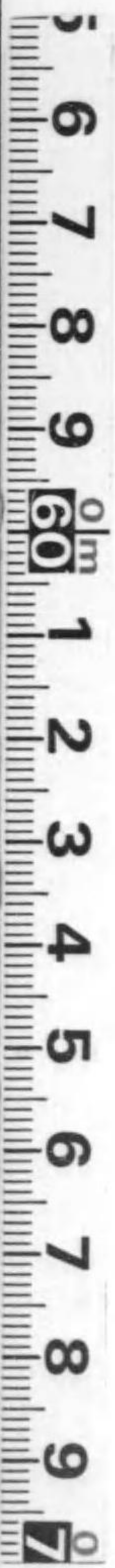


324  
328



始





324  
328

新編臺灣通志卷之表



眞言祕藏 經疏隱密  
不假圖畫 不能相傳  
祕密藏以曼荼羅爲體

密教發達流傳年表

この小冊子は、兩部曼荼羅史考を造らるるに、座右に置きて、毎に密教當體の變遷に徴せむとて、そごろに抄記したるなり。密教圖像の形式は、印度と支那とにて成り、日本は専らこれを傳持したるのみなれば、その物獨り多く我が國に存ず。雖も、この研究は、その典刑の成るに至るまでの過程に在りて、餘はこれを美術史に譲るを妥とするが故に、この年表も、大陸を主として八家の求法に止めつ。舊譯經中事密發展のさまご、呪術家及傳教者の國籍、經路とは、最も考察に肝要なることを思ひ、聊か意をこくに用ゐたり。趙宋新譯の經軌に至りては、たゞその書ありて、その法を傳へたるに非ざるを以て、全くこれを省きぬ。印刷に附して同好に贈らむとするに臨み、

大正改元臘八

蕤咽耶野那俗弟子大村西崖識す。

大村西崖

寄贈本

1. 12. 24



長阿含曰瞿曇呵責一切諸祭祀法

四分律曰誦習世俗呪術者波逸提

秦 二四六—二〇七

○印度バルフウト塔欄彫刻に俱毗羅藥叉及龍王等の圖あり。外道の神物佛敎に混入せることの極めて古きを知るべし。

前漢 前二〇六—後二四

○印度カンダギリの「アナンタ」窟搏風及サンチイ大塔門彫刻に、吉祥天の乳海涌出あり。この事婆羅門敎の所談に出づ。

後漢 二五—二二〇

○失譯安宅經、賊呪經あり。安宅經に七里結界の語及然燈掃灑、燒香の事あり。賊呪經には佛前然燈、燒香、散華の事あり。これを佛經に明呪及密敎事相ある濫觴とす。

三國 二二—二六四

○南印度龍猛菩薩世に出づ。呪術を善くし、呪明の要に精し。

○印度沙門呪を以て維祇難を伏す。維祇難元火祀を事とす。後佛法に入りて沙門と爲り、西域を経て江右に至る。孫權黃武三年、武昌郡に於いて經を譯す。

○支謙は大月支の人なり。祖父法度、漢靈帝の時、國人數百を率ゐて歸化す。支謙黃武より建興二年まで譯經三十餘載。後山中に卒す。春秋六十。譯する所持句經、華積經及無量門經あり。

西晉 二六五—三一六

○印度龍猛菩薩世に在り。著す所大智度論中、始めて顯密二敎の目あり。但その謂はゆる祕密敎は、即ち顯示敎の阿羅漢乘に對する菩薩乘にして、後の謂はゆる眞言密敎に非ず。

○印度健駄羅の彫刻に日天及燒火の圖等あり。



○印度龍猛菩薩の弟子難陀、意を呪明に漬し、西印度に在ること十二年、専心呪を持す。仍りて呪明の散失を恐れ、十二千頌を撮集して一家の言を成す。毎に一頌の内に於いて、呪印の文を離合し、言同じく字同じと雖も、義別用別。口づから傳授するに非ざれば、解悟すること難し。

○帛尸梨蜜多羅は西域の人なり。西晋永嘉中始めて到り、元帝の代、經を譯し、咸康中年八十餘にして卒す。善く呪術を持し、向ふ所驗あり。盛に建康に行はる。時人呼びて高座法師と云ふ。譯する所大灌頂經あり。始めて灌頂作法、懸旛蓋、洗浴、著淨衣、香汁塗地、七日長齋、幡畫鬼神、用鏡照魔の事相あり。外道乃至俗間所信の神物を網羅せるは、この經を初めとす。又孔雀經の結呪界法を譯す。三重規界、牛屎泥地、芥子燒火等の事あり。

○曇無蘭は西域の人なり。孝武大元六年より二十年に至るまで、楊都に在りて、陀鄰尼鉢經、玄師廳陀經、檀特羅麻油述經、摩尼羅直經、呪時氣病經、呪齒經、呪目經、呪小兒經を譯す。呪時氣病經に始めて結縷繫身の事あり。

○佛陀跋陀羅は印度迦維羅衛國の人なり。祖父達摩提婆嘗て北天竺に商旅し、因りて居る。葱嶺を度り、路六國を経て交陞に入り、舶に附して青州に至り、長安に達す。安帝隆安二年より宋永初二年まで、經を楊都及廬山に譯し、宋元嘉六年泥洹す。春秋七十一。譯する所出生無量門持經あり。經中呪の字義を説けるあり。又その譯する所方等部觀佛三昧海經に、後の胎藏の四佛及香泥塗地、觀佛供養、金剛神降伏、曠野鬼等の事あり。跋陀羅又六十華嚴を譯す。その毗盧遮那佛刹蓮華藏莊嚴世界海は廣大曠嚴を極め、又神變加持、四種法身、因根究竟等、後の密教所談の思



想、既に經中に彌綸せり。

○竺難提は西域の人なり。恭帝元熙元年來る。宋の世に至りて、請觀音消伏毒害經を譯す。

○失譯師子奮迅菩薩經、華聚經、七佛八菩薩經、善法方便經、金剛祕密善門經、六字呪王經あり。七佛八菩薩經中、始めて向東誦呪の事あり。

三秦 三五二—四三一

○鳩摩羅什は天竺の人なり。龜茲、罽賓等の間に往復す。建元十九年、呂光龜茲國を伐ちてこれを得たり。弘始三年姚興これを常安に迎ふ。四年より十四年に至るまで經を譯し、十五年四月寂す。春秋七十。譯する所般若大明呪經、彌勒下生經、孔雀王呪經あり。

○佛馱耶舍は罽賓の人。世々外道に事ふ。幼にして佛法に入り、世

間法術皆練習す。沙勒、龜茲に遊化し、羅什を慕ひて龜茲を脱し、呪法を以て追難を免れ、弘始八年姑臧に至る。十五年まで經を常安に譯す。後西に還り、終る所を知らず。

○失譯大金色孔雀王呪經あり。

北涼 三九七—四三九

○法衆は高昌郡の人なり。永安年中、張掖に於いて河西王蒙遜の爲に、大方等陀羅尼經を譯す。

○安陽侯沮渠京聲は河西王蒙遜の從弟なり。少時嘗て流沙を度りて于闐國に到り、瞿摩帝大寺に於いて、天竺法師佛陀斯那に遇ひ、諸の祕密術等を受けて涼に歸る。宋の孝武孝建二年、楊都に於いて彌勒上生經を譯す。大明末卒す。

○曇無讖は中印度の人なり。六歳にして沙門達摩耶舍の弟子と爲り、十歳にして同學數人と呪を誦し、聰敏群を出づ。大小乘經



の外呪術を明解し、向ふ所皆驗あり。西域號して大神呪師と爲す。曾て王に隨ひて山に入り、石を呪し水を出して王の渴を醫す。王その道術を悦び、優寵を加ふ。既にして王のこれを待つこと漸く薄し。讖怒り、龍を呪して豊に入れ、天下を早せしめむこと密に王に告ぐる者あり。讖誅を懼れて龜茲に奔る。河西王蒙遜これを迎ふ。乃ち立始三年より十五年に至るまで、爲に經を譯す。嘗て遜に告げて曰はく、鬼あり。聚落に入る。必ず災疫多からむ。遜信ぜずして躬から見て驗を爲さむと欲す。讖即ち術を以て遜に加ふ。遜駭怖す。讖曰はく、呪を以てこれを逐ふべし。乃ち讀呪三日。遜に謂ひて曰はく、鬼北に去ること。既にして北境の外疫死萬數なり。遜益敬憚す。義和三年三月、遜の爲に殺さる。時に年四十九。

元魏 三九六—五五〇

○印度陳那菩薩はこの頃の出世ならむ。難陀の呪藏を讀みて歎賞して曰はく、嚮にこの賢をして意を因明に致さしめば、我復何の顔あらむやと。

○和平三年曇曜大吉義經を譯す。佛法中結呪界法の説、及天龍鬼神の像を畫くことあり。

○菩提留支は北印度の人なり。遠く葱左に莅みて東華に止まる。永平元年より天平二年まで、譯經に従事す。兼ねて呪術を工にし、敢て抗行する者なし。嘗て呪を以て井水を上涌せしめ、以てこれを汲む。人皆驚歎す。留支曰はく、妄りに賞むること勿かれ。これ即ち術法にして、外國共に行はること。世を惑はすことを懼れて、遂に祕して宣せず。譯する所護諸童子經あり。

○佛陀扇多是北印度の人なり。藝術に工なり。孝明帝正光六年より孝靖帝元象二年に至るまで、經を洛陽に譯す。訶離陀鄰尼經



あり。

劉宋 四二〇―四七八

○ 薑良耶舍は西域の人なり。元嘉元年沙河を冒して建業に至り、經を譯す。十九年岷蜀に遊び、太始四年還りて江陵に卒す。春秋六十。譯する所藥王藥上經中、二菩薩身觀想の事あり。

○ 求那跋摩は罽賓の人なり。師子國を経て闍婆に至り、嘗て闍婆王の爲に呪してその傷を治する。二たび。元嘉八年正月、文帝に迎へられて建業に至り、譯經に従事し、年六十五にして卒す。  
○ 求那跋陀羅は中印度の人なり。本婆羅門種。幼にして五明諸論を學び、天文、醫方、呪術等博慣せざるなし。師子國に至り、更に舶に附して、元嘉十二年廣州に至る。海中風止むに遇ひ、呪を誦して信風を得たり。宋に來りてより専ら譯經に従事す。大明七年、孝武帝の勅を奉じて、祈りて雨を降す。太始四年卒す。年七十五。

譯する所訶離陀經あり。

○ 功德直は西域の人なり。孝武大明六年遊至す。譯する所無量門破魔經あり。經中帛に鬼像を畫く事あり。

蕭齊 四七九―五〇一

○ 求那毗地は中印度の人なり。道術の稱西域に聞ゆ。建元の初め江淮に來り、武帝永明十年より經を譯し、中興二年冬卒す。

蕭梁 五〇二―五五六

○ 僧伽婆羅は扶南國の人なり。舶に附して齊都に至り、天竺沙門求那跋陀の弟子と爲り、天監五年より普通元年に至るまで經を譯し、五年春秋六十五にして卒す。譯する所孔雀王呪經、舍利弗經あり。孔雀經中龍王、藥叉、鬼母、女鬼等の名多し。

○ 失譯六字呪經、牟梨曼陀羅經、七佛呪經、六字大呪經、大七寶經、摩利支天經、大普賢經、陀羅尼雜集あり。牟梨曼陀羅經には、始めて



三業の目及印契あり。從前の諸經皆たゞ呪あるのみにして印契あらず。見るべし。事相の漸く發展せることを。この經又白氎の畫像法頗る詳密にして、諸尊を列畫すること、後の謂はゆる曼荼羅の如し。又始めて畫壇あり。四門、五色界道、諸尊を畫き、四角に各、一箭を挿し、五色線もてこれを繫圍す。燒火の法亦始めて備はり、四方、辟方及三角の火爐あり。燒火の十種相等を説く。明呪にも亦始めて結界、護身、淨衣、淨手面、呪華、香、燈、食、指、珠、覺、悟、迎送等ありて、行法の次序漸くその式を成せり。陀羅尼雜集にも畫像法及乳木燒火の事あり。

高齊 五五〇―五七七

○鄴都東大覺寺僧僧範、七曜九章、天竺呪術に精通せり。天保六年寂す。年八十。

○那連提黎耶舍は北印度烏場國の人なり。雪山の北に行化し、觀

音呪を誦して鬼難及賊難を免る。循路東を指し、突厥通ぜざるを以て、北に轉じて泥海の旁に至り、天保七年鄴都に達す。時に年四十。文宣帝に禮遇せられ、八年より天統四年に至るまで、經を鄴城に譯す。曾て舍利弗陀羅尼に依りて具修し、暇時常に神呪を陳す。隋の開皇五年正月更に請雨經を譯し、開皇九年八月滿百歲にして化す。

○萬天懿は拓跋氏、北代雲中の人。呪術に工なり。武成帝河清中、經を鄴都に譯す。

陳 五五七―五八〇

○南印度馱那羯磔迦國婆毗吠伽論師芥子を呪して巖壁を開き、阿素洛宮に入りて慈氏の出世を待ちしと云ふは、この頃ならむ。鐵塔相承の話說或はこれより出でしか。

宇文周 五五七―五八一



○闍那耶舍は中印度摩伽陀國の人なり。二弟子耶舍崛多、闍那崛多と共に來り、武帝保定四年より建德元年に至るまで、經を長安に譯す。天和五年の出に請雨品あり。壇法頗る精しく、壇上龍を畫き、四角安瓶の事あり。

○耶舍崛多は優婆國の人なり。武帝の時經を譯す。十一面神呪經あり。經中説く所、畫像法頗る精しく、壇法に香水灑地、四角豎柱の事あり。この經は金剛大道場神呪經十萬偈中の一品なり。後の唐阿地瞿多譯陀羅尼集經も、亦金剛大道場經より鈔出せりと云へれば、その本即ち同じ。唐の道琳の言ふ所の十萬頌持明藏は、蓋しこれならむ。

隋 五八一—六一七

○闍那崛多は北印度健駄羅國の人なり。富留沙富邏城に居る。遊方弘法を志し、師徒相挈へて境を出で、路迦臂施國に由り、大雪

山の西足を踰え、厭怛國に入り、謁羅槃陀國、于闐國を経て吐谷渾國に達し、漸く鄯州に至る。時に西魏後元の年なり。周明武成の年、長安に止まり、武帝の代に種々雜呪經等を譯す。北齊武平六年、同行を結びて經を西域に採り、往返七年、廻りて突厥に至り、周武の滅法を聞いて止まる。隋の開皇四年、文帝の勅を得て國に入り、開皇五年十一月一向出生菩薩經、七年正月如來方便善巧呪經、四月不空罽索經、五月十二佛名經を譯し、又東方最勝燈王如來經等を譯す。婆羅門沙門若那竭多、婆羅門毘舍達、婆羅門達摩笈多等、度語を助く。曾て曰はく、于闐の東南二千餘里、遮拘迦國あり。山窟に大集、華嚴、方等、寶積等の諸經、及舍利弗、華聚二陀羅尼を置く。各、十萬偈あり。この後の大日經序の、勃嚕羅國の山窟に大日經を藏せり。この話説は、或はこの事より出でしか。崛多亦能く總持神呪の理に通ぜり。開皇二十年春秋七十八に



十六  
して物故す。如來方便善巧呪經中、酪蜜燒火の事あり。

唐

武德 六一八―六二六

○中天竺婆羅門僧瞿多提婆、細氈上に千眼千臂觀音の形質を圖畫せるもの、及結壇手印經本を齎らし、京に至りて進上す。太武見て珍せせず。その僧悒々として轡を旋らす。

貞觀 六二七―六四九

○三年玄奘渡天す。

○四年玄奘北天竺磔迦國に長年の婆羅門を見る。付法傳これを龍智と爲せれど、取るに足らず。

○七年玄奘那爛陀寺に入る。

○十一年善無畏中印度摩伽陀國に生る。玄奘那爛陀寺を去る。

○十四年玄奘那爛陀寺に還る。

○十六年。これより先、南印度王の灌頂師般若龜多と云ふ者あり。破大乘論を造る。玄奘制惡見論を造りてこれを破す。

○十七年玄奘歸路に就く。

○十九年玄奘長安に歸る。六門陀羅尼經を譯す。

○二十年玄奘西域記を著す。

○貞觀中天竺の僧千臂千眼經の梵本を費して文帝に進む。智通勅を受けて梵僧と共にこれを譯す。北天竺の婆羅門僧蘇伽施常にこの法を持し、結壇手印、朝夕虔祈す。後慧琳これと共に同經の身呪を譯す。この經始めて白檀塗壇及水壇の法あり。未だ大都會三曼荼羅を経ざる者は、必ずこの法門呪印を見ることを得ずと説きて、祕教の質既に著きを見る。又曰はく、婆羅門國別に擇地の方法ありと。謂はゆる三曼荼羅は、想ふに後の蘇悉地、瞿醯二經説く所の三部曼荼羅にして、道琳、義淨の那爛陀寺



及羅茶國に於いて入壇せるも蓋しこれならむ。

○西天竺僧伽梵達摩が千手千眼經を譯出せしもこの頃か。

永徽 六五〇—六五五

○元年、玄奘五月藥師經、七月諸佛心經を譯す。

○この年師鞭玄照と共に印度に入り、西印度菴摩羅割跋城王寺に居る。一夏にして寂す。年三十五。呪禁を善くせり。

○三年正月、中印度の阿地瞿多、雪嶺を踰え沙河を度りて、長安に至る。沙門大乘琮等十六人、英公、鄂公等十二人、慧日寺浮圖院に請じ、普集壇を建て、所須を供辦して始めて灌頂を受く。

○四年正月、智通普賢陀羅尼經を譯す。後又千轉經、隨心呪經を譯す。隨心呪經の附記に依るに、經末の一印は梵本に闕けたるを、玄奘より受けたるなり。時に中天竺國長年跋吒那羅延、罽賓國沙門喝囉那僧伽、共に三曼荼羅會にこの法を受持す。後勅に、因

りて京に入る。智通依りて七日如法の壇を作りてこれを傳へ、以てこの印法を譯せるなり。經中五十印呪あり。先の牟梨曼陀羅經に比するに、行法の次序一層廣を加へ、又始めて字輪觀あり。従前の諸經大抵皆誦呪の功力に依りて本尊現身すと説く。こゝに至りて始めて主觀の本尊あり。發展の顯著なるを認む。後の謂はゆる種子も、亦この經に於いてその嚆矢を見る。

○五年四月阿地瞿多陀羅尼集經を譯す。同時に中印度大菩提寺の僧阿難律木叉師、迦葉師功德天法を譯す。集經の内に編入せらる。集經は金剛大道場經の鈔譯なり。この經に至りて、諸尊法大いに備はり、始めて佛、觀音、金剛、諸天四部の別あり。即ち後の胎藏の佛、蓮、金の三部及外金剛部なり。七日七夜都大道場普集會、曼荼羅は、本尊を施主所樂の佛等と爲して、未だ一定せず。雖も、結界、塗壇、拏繩、點位、四角釘、繞呪、素、中央佛、右觀音、左金剛、唯



開西門、投華灌頂、穿作火爐、燒火供養等、優に胎藏大法の壘を摩し、又帝王壇、受法壇、水壇の別あり。般若、白衣、摩麼雞三部母始めて定まり、更に始めて佛頂の發達し、三昧耶形の出で來れるを見る。後日本最澄の傳ふる所の雜曼四種の中、普集會、軍荼利の二曼荼羅は、蓋しこの經中所說のものなり。

○同年九月、亥、熒、拔濟苦難經、勝幢經、八名普密經、十月、持世經を譯す。

顯慶 六五六—六六〇

○元年三月、亥、熒、十一面經を譯す。

○四年四月、亥、熒、羈索經を譯す。

龍朔 六六一—六六三

麟德 六六四—六六五

○元年二月、亥、熒、寂す。行年六十五。譯する所上出の外、千轉經あり。

乾封 六六六—六六七 總章 六六八—六六九

咸亨 六七〇—六七三

○二年十一月、義淨廣州より印度に向ひ、室利佛逝國に留まる。

○この年金剛智中天竺に生る。

○四年二月、義淨耽摩立底國に至り、留まる。ここ一歲。梵語を學ぶ。

上元 六七四—六七五

○元年、義淨那爛陀寺に入る。

儀鳳 六七六—六七八

○元年、北印度罽賓國の沙門、佛陀波利、遠く流沙を涉りて、五臺山に至る。

○儀鳳の初、中印度の沙門、地婆訶羅來遊す。尤も呪術に工なり。

調露 六七九

○元年正月、佛陀波利、杜行顛共に佛頂尊勝陀羅尼經を譯す。地婆



○訶羅及寧遠將軍度婆證譯す。

永隆 六八〇

○金剛智年甫めて十歳。那爛陀寺に出家し、寂靜智に依りて聲明論を學ぶ。

開耀 六八一

永淳 六八二

○五月地婆訶羅佛頂最勝陀羅尼經を譯す。

弘道 六八三

○佛陀波利佛頂尊勝陀羅尼經を譯す。

嗣聖、文明、光宅 六八四

○金剛智西天竺に至りて法稱論を學ぶ。

垂拱 六八五—六八八

○元年義淨無行に那爛陀寺に別る。無行時に年五十六。後北天竺

に至りて卒す。その將來の梵本は、勅に依りて迎還す。無行嘗て天竺より書を唐に寄せて曰はく、近者新に眞言教法あり。舉國崇仰す。知るべし。印度密教の完成に近づきて大いに流行せるは、初唐頃より古からざることを。義淨の那爛陀寺に在るや。屢々入壇して呪明を受く。同時に道琳亦印度に在り。曾て東印度耽摩立底國に在りて、梵語を學ぶ。ここ三年。有部律學の餘、深く呪藏に耽る。既にして中天に至りて那爛陀寺に入り、大乘經論及俱舍を搜覽して數年を経、後南天に遊びて玄謨を搜訪し、西印度に向ひて羅茶國に住まる。ここ亦數年。更に靈壇を立て、重ねて明呪を稟く。嘗て論じて曰はく、この呪藏梵本十萬頌あり。唐譯三百卷を成すべし。現今これを覓むるに、多く失せて少しく全し。知るべし。先の難陀の一萬二千頌の呪藏次第に増備して、こゝに至り、やがて散逸し始めたることを。



○この年地婆訶羅准提經を譯す。

○四年金剛智那爛陀寺に還る。

永昌載初 六八九

○七月義淨還りて廣州に至り、十一月再び室利佛逝國に遊ぶ。

○于闐國沙門提雲般若來る。呪術に通曉す。

天授 六九〇—六九一

○元年金剛智具足戒を那爛陀寺に受け、大小乘律論を學ぶ。

○二年提雲般若智炬、諸佛集會二陀羅尼經を譯す。戰陀、慧智度語。

○この年五月、義淨南海傳及求法高僧傳を著して唐に寄す。

如意、長壽 六九二—六九三

○二年北印度迦濕彌羅國沙門阿彌真那洛都に至る。尤も呪術に

妙なり。十月羈索經を譯す。又隨求經を譯す。羈索經には灌頂壇

に地壇、國壇、民壇の目あり。又印器仗莊嚴壇あり。即ち後の謂は

ゆる三昧耶曼荼羅とす。隨求經は罽賓の沙門尸利難陀等梵文  
を證し、李無詔譯語、李無礙筆受せり。經中説く所の曼荼羅は、亦  
これ三昧耶曼荼羅なり。

○この年菩提流志亦來る。南印度の婆羅門種なり。呪術掌を指す  
が如し。先に永淳二年高宗その名を聞きて、使を遣はしてこれ  
を迎ふ。こゝに至りて實相般若經、金剛髻珠菩薩修行分、六字神  
呪經、護命法門經を譯す。金剛髻珠修行分には、始めて越三昧耶  
の説及三種、三等の曼荼羅、三種の三摩地、三摩耶の目あり。實相  
般若經は後の理趣經法の初出なれども、未だ金剛頂部の思想  
あるを認めず。

延載 六九四

證聖、天册萬歲、萬歲封登 六九五

○于闐國の沙門實叉難陀洛陽に來る。



○五月義淨洛陽に歸る。

萬歲通天 六九六

神功 六九七

○烏代那國の婆羅門僧達磨戰陀、善く呪明に通じ、常に詔を奉じて翻譯す。妙氎上に千臂菩薩の像を畫き、千臂經呪と共に進上す。天后宮女をして繡成せしめ、又匠人をして畫かしめ、天下に流布して靈姿を墜さざらしむ。

聖曆 六九八—六九九

○元年金剛智迦維羅衛城に於いて、勝賢論師に大乘諸論を學ぶ。久視 七〇〇

○婆羅門李無詔は北印度嵐波國の人なり。阿彌眞那、菩提流志等の經を譯するや、竝に無詔をして度語せしむ。この年三月婆羅門大德僧迦彌多囉と共に、絹索經を譯す。沙門波崙筆受す。八月

譯本を將ちて、更に厨賓に於いて重ねて梵本を勘へ、而る後流布す。

大足、長安 七〇一—七〇四

○元年九月義淨善夜經、莊嚴王呪經を譯す。

○この年金剛智三十一歳。龍智に南天に師事す。

○二年阿彌眞那文殊一字經を譯す。文殊呪藏譯出の初めなり。婆羅門李無詔度語し、直中書李無礙筆受す。

○三年十月義淨一字呪王經を譯す。

○四年實叉難陀于闐國に還る。譯する所、華嚴心陀羅尼、地藏本願經、餓鬼神呪經、甘露經呪、百千印呪、妙臂印幢經、如意輪經あり。

○天后末年觀貨羅國の人彌陀山無垢淨光經を譯す。尋いで還る。神龍 七〇五—七〇六

○元年正月阿彌眞那數珠功德經、一字神呪經を譯す。竝に李無詔



度語。後又如意摩尼經を譯す。

○般刺蜜帝は中印度の人なり。隨緣展轉して廣州に遊化し、首楞嚴經を譯す。烏菟國沙門彌伽釋迦語を度せり。題下の注記に曰はく。一名中印度那爛陀大道場灌頂部錄出別行。經中の長呪は即ち白傘蓋佛頂陀羅尼の初出にして、謂はゆる金剛大道場は、中壁に盧舍那、釋迦、彌勒、阿閼、彌陀、左右壁に諸大變化觀音と金剛藏等とを畫くなり。亦これ胎藏法と略その揆を一にす。殊に毗盧遮那佛を華嚴に取りて中尊と爲せるは、この經を以て嚆矢とすべし。先の集經普集會曼荼羅の内院の中尊を定めざるに比して、密教成立上一段の發達なり。又無量壽、阿閼、藥師、娑羅華王の四佛あり。又始めて五種族の目あり。謂はゆる如來族、蓮華族、金剛族、摩尼族、衆族これなり。摩尼族は後の金剛頂宗の寶部の萌芽にして、衆族は即ち胎藏の外金剛部に當れり。

○七月義淨、莊嚴王經を譯し、後又香王經、大孔雀經を譯す。孔雀經の附記に曰はく。五天の地、南海十洲及北方土貨羅等二十餘國、道俗大小乘を問ふことなく、皆共にこれを尊敬す。日本役小角の持せりと云ふ孔雀法は、蓋し南海より傳はりしか。

○この年不空師子國に生る。

○二年九月菩提流志寶樓閣經を譯す。東印度婆羅門大首領直中書伊舍羅度語。

景龍 七〇七—七〇九

○元年夏義淨、藥師七佛經を譯す。

○この年金剛智龍智を辭して中天に還り、尋いで八塔を禮し、後南天に在りて立壇灌頂し、又師子國に至る。

○二年實叉難陀再び來る。復經を譯せず。

○三年夏菩提流支三十卷絹索經、千手千眼姥陀羅尼身經、如意輪



經、一字佛頂經を譯す。弟子般若丘多同じく梵本を宣す。姥陀羅尼身經には、曼荼羅の界道に金剛杵を連ね畫くことあり。後の金剛界曼荼羅に似たり。羅索經は行法の印呪益、整備し、曼荼羅も頗る廣博にして、その廣大解脫曼荼羅は大樣胎藏法に類せり。この經始めて明王及三昧耶像の目、並びに五十餘字門義あり。從前の諸經は皆三昧耶形を印又は器仗と呼べり。一字佛頂經の大法壇も亦胎藏に酷似し、四佛は胎藏に同じ。中壇は三昧耶形を畫き、下壇はたゞ座を畫く。又三種護摩の目始めて備はり、觀想も二經共に後の謂はゆる道場觀と爲り、殊に佛頂經はその印呪亦各、これに伴へり。

景雲 七一〇—七一一

○元年四月義淨數珠功德經を譯し、後又如意心經、尊勝經、拔除罪障經、療痔病經を譯す。

○十月實又難陀寂す。春秋五十九。

○この年菩提流志止風雨經、文殊法寶藏經を譯す。並びに弟子般若丘多同じく梵本を宣す。流志の譯する所と傳ふるものに、尙大隨求經、使呪法經あり。貞元錄これを載せず。大隨求經中、勅令の印契多し。後の金剛頂部の教勅の思想に類す。

○二年閏六月義淨稱讚如來功德經を譯す。

太極、延和、先天 七一二

開元 七二三—七四一

○元年正月義淨寂す。春秋七十九。

○この年菩提流志の譯了せる寶積經中、始めて三密の語あり。

○四年善無畏長安に至る。曾て印度に在りて、密教を那爛陀寺達摩掬多に受け、迦濕彌羅國、烏菴國に過り、雪山を越えて唐に入る。玄宗禮遇し、內道場に請じて教主と爲す。支那胎藏大法の權



輿なり。齋す所の梵本並びに内に進めしむ。

○五年八月、善無畏虚空藏求聞持法經を譯す。沙門悉達度語す。題下に注記して、金剛頂經成就一切義品に出づと言ふ。即ち金剛頂部譯經の初出なり。經中月輪内畫像及五佛寶冠あり。又始めて月輪觀を説く。

○この年金剛智再び師子國に至り、尋いで闍婆國に至る。

○六年不空年甫めて十四。闍婆國に於いて金剛智に従ふ。

○この年道慈求聞持法を善無畏の弟子より傳へて、日本に還る。

○八年金剛智不空を伴ひて東都に至る。曼荼羅を建て、灌頂す。一行等これを受く。支那金剛頂大法の權輿なり。

○九年智嚴出生無邊門經並びに尊勝陀羅尼及法華經藥王菩薩の新呪を譯す。智嚴は于闐國王の質子にして、幼より唐に居り、景龍元年出家せるなり。

○この年阿彌眞那寂す。壽百餘歲。

○十一年金剛智佛母准提經、金剛頂略出經を譯す。略出經は即ち金剛頂部本經の初出なり。従前の諸經は大概釋尊の所説として作られしものにて、後皆雜密經と稱せらる。略出經は即ち毗盧遮那佛の所説として作られしものにて、謂はゆる純密經の權輿なり。

○十三年善無畏一行の爲に大日經及念誦法を譯す。これより先、無畏將來の梵本皆内に進めたるに縁り、翻譯するここ能はず。然るに曩時無行將來の梵本西京華嚴寺に在り。無畏一行と共にこれを簡びて梵經數本を得たり。並びに總持妙門、未だ譯出せられざるものなり。ことに至りて大日經を譯す。梵本十萬頌の撮要と云ふ。雖も、胎藏本經始めて備はれり。

○十四年善無畏蘇婆呼、蘇悉地二經を譯す。蘇悉地部經の初出な



- り。
- この年達摩戰涅槃龜茲國に於いて具足戒を受く。
  - 十五年九月一行寂す。年四十五。著す所、大日經疏、七曜星辰別行法、北斗七星護摩法、梵天火羅九曜、佛眼儀軌、宿曜儀軌等あり。儀軌と稱するもの、これよりして有り。
  - この年十一月菩提流志寂す。壽百五十六。
  - 同月新羅の慧超五天を歴遊して安西に至る。
  - 十八年金剛智金剛頂經文殊五字心品及如意輪瑜伽法要を譯す。この二經は即ち金剛頂部諸尊法の嚆矢にして、従前の諸尊法の大概皆胎藏系統なるに反し、金剛智、不空の新譯に係るものは、同尊の法にても、多くは金剛頂宗に改まれり。
  - この年達摩戰涅槃龜茲國より唐に向ふ。
  - 十九年金剛智金剛頂經毗盧遮那三摩地法、千手千眼大身呪本、

- 千手千眼大悲心呪本、不動使者祕密法を譯す。
- 二十年北天竺の阿質達霰安西に於いて烏樞瑟摩經、穢跡金剛靈要門、同百變法を譯し、東天竺の達摩戰涅槃が、弟子地戰涅槃字利言と共に、安西節度使呂休林に従ひて入朝するに附して貢獻す。利言眞言五千偈を持ち、諸國語に通じ、師の譯經を助く。
  - 二十一年正月慧超金剛智に従ひて曼殊千臂千鉢法を受く。
  - 二十二年般刺若北印度迦畢試國に生る。
  - 二十三年十月善無畏寂す。世壽九十九。法臘八十。
  - 二十八年十二月金剛智曼殊千臂千鉢經を譯す。慧超筆受す。
  - この年般刺若出家す。
  - 二十九年二月、金剛智曼殊千臂千鉢經の梵本及五天竺阿闍黎の書を以て、梵僧目叉難陀婆伽に付し、師子國本師寶覺阿闍黎に與へしむ。



○七月達摩戰涅羅西域に還る。

○八月金剛智化す。壽七十一。臘五十一。瑜祇經亦その所譯と云ふ。

○十二月不空崑崙の舶に附して再たび渡天す。

天寶 七四二―七五五

○元年不空師子國に至り、佛牙寺に於いて、普賢阿闍梨を師とし、金剛頂法を重受し、三密護身、五部契印、曼荼羅三十七尊、瑜伽護摩、皆備さに精練す。

○二年十一月達摩戰涅羅于闐國に寂す。壽九十一。法夏七十二。

○この年含光印度に入り、慧習と共に、不空と五部灌頂を同受す。

○五年不空金剛頂瑜伽經等八十部、大小乘經論梵夾二十部、千二百卷を齎し、小使彌陀を伴ひて師子國より歸る。詔を奉じて經を譯し、灌頂壇を開く。

○六年含光長安に歸る。

○八年不空本國に還ることを許されて南海郡に至り、再たび勅に依りて留まる。

○九年烏仗那國の沙門越魔唐に至る。

○十年悟空勅を奉じて尉賓に使す。

○十二年二月悟空健馱羅城に至る。

○この年節度使哥舒翰の請に依り、勅して不空をして河隴に赴かしむ。含光影隨す。

○この年般刺若迦濕彌羅國に於いて具足戒を受く。時に年二十。

○十三年不空武威に至る。節度使洎賓、功德使李元琮及弟子含光等に金剛界の灌頂を授く。西平郡王の爲に金剛頂攝大乘經、菩提場所說一字頂輪王經、一字頂輪王瑜伽經、同念誦儀軌を譯す。

○十四年二月、利言安西より迎へられて武威に至り、經を譯す。

○十五年不空詔を奉じて河西より歸る。



至德 七五六―七五七

○元年般刺若那爛陀寺に大乘經論を學ぶ。住まること十八年。

○二年悟空健馱羅城に於いて僧と爲る。時に年二十七。

乾元 七五八―七五九

○元年三月不空奏して、中京慈恩、薦福、東京聖善、長壽、福光諸寺、並びに諸州縣舍寺村坊に散在せる義淨、善無畏、菩提流志、寶勝等將來の梵夾を搜收す。

○十二月不空奏して南天所得經の翻譯を許さる。

○この年鬪賓の般若力、中天婆羅門善部末摩、箇失密の舍那來る。官を與へて放還す。

○二年悟空迦濕彌羅國に於いて具足戒を受く。

○この年不空宿曜經を譯す。肅宗不空を請じて内に入れ、護摩及灌頂を行ぜしむ。

上元 七六〇―七六一

○元年不空奏して、大興善寺に灌頂道場を修することを請ふ。

寶應 七六二

廣德 七六三―七六四

○元年不空奏して、國の爲に毎歲灌頂道場を置くことを請ふ。

○二年悟空中印度に遊ぶ。那爛陀寺に住まること三歲。

永泰 七六五

○四月不空密嚴經、仁王經、同念誦法及文殊讚佛法身禮を譯す。

大曆 七六六―七七九

○三年大興善寺に道場を建て、近侍、大臣、諸禁軍使に勅して、灌頂を不空に受けしむ。

○四年不空虛空藏所問經及同經念誦法を譯す。

○六年六月不空三朝譯經七十七部百一卷を進めて入藏を請ふ。



○八年十月不空文殊功德莊嚴經を譯す。

○九年六月不空寂す。壽七十、臘五十。弟子慧朗灌頂位を紹ぐ。不空の遺書に曰はく。吾當代灌頂三十餘年。入壇受法の弟子頗る多し。五部琢磨、成立八箇、淪亡相次ぐ。唯六人あり。それ誰かこれを得たる。則ち金閣の含光、新羅の慧超、青龍の慧果、崇福の慧朗、保壽の元皎、覺超あり。後學疑あらば、汝等開示せよと。

○この年般刺若南天持明藏を尙ぶことを聞き、烏茶國に往いて、王寺の灌頂師達摩耶舍に従ひ、瑜伽教を受けて曼荼羅に入り、三密護身、五部契印を傳へ、住まること一年。三千五百餘頌を諷満す。

建中 七八〇—七八三

○元年五月慧超五臺山に於いて曼殊千臂千鉢經を再録す。

○二年般刺若師子國より舶に附して廣府に至る。

○三年般刺若長安に達す。

興元 七八四

貞元 七八五—八〇四

○四年十一月般刺若大乘理趣六波羅蜜經を譯す。

○五年二月般刺若六波羅蜜經中の眞言契印法門を再譯す。

○六年。悟空曾て烏仗那國の越魔より梵夾を受け、北路覩貨羅國等を経て安西に至り、龜茲國の沙門勿提提犀魚に十力經を譯せしめ、于闐國の沙門尸羅達摩に十地經及廻向輪經を譯せしめ、齋して歸り、二月上都に達す。

○この年般刺若守護國界主經及心地觀經を譯す。心地觀經の梵本は、高宗の朝、師子國より進めしものなり。

○この年七月般刺若勅を奉じて、北印度迦濕彌羅國に使す。

○八年四月般若北印度より歸る。後諸佛境界攝眞實經を譯す。



○九年牟尼室利那爛陀寺を發し、北印度を経て唐に向ふ。  
十六年牟尼室利長安に至る。

○二十年日本僧最澄明州に至る。十月台州國清寺に於いて、大佛頂曼荼羅を傳ふ。

○八月日本僧空海福州に至り、十二月長安に入る。

永貞 八〇五

○四月最澄義真と共に、越州龍興寺に於いて、順曉に就いて、五部灌頂曼荼羅に入る。五月最澄集經普集會壇及如意輪曼荼羅を傳へ、又明州開元寺に於いて軍荼利壇及其の契像を傳へ、日本に還る。

○六月空海長安青龍寺慧果に就いて、胎藏法を受け、七月金剛界法を受け、八月傳法阿闍梨位灌頂を受く。慧果供奉の畫工李眞をして兩部曼荼羅等を畫かしめ、道具と共にこれを空海に與

ふ。

○十二月慧果寂す。春秋六十、法夏五十。

元和 八〇六—八二〇

○元年六月牟尼室利寂す。曾て般若と共に造塔延命功德經を譯せり。

○この年八月空海日本に還る。

○十五年慧琳寂す。年八十四。慧琳は疎勒國の人なり。不空に師事す。著す所新集浴像儀軌、建立曼荼羅及揀擇地法あり。

長慶 八二一—八二四

○元年十二月青龍寺東塔院比丘海雲、西方陀羅尼藏中金剛族阿蜜哩多軍荼利法を寫記す。

○四年中天竺那爛陀寺沙門菩提唎使、大聖妙吉祥八字儀軌法を譯す。文殊菩薩普集會經の一分なり。



寶曆 八二五―八二六

太和 八二七―八三五

○八年十月海雲兩部の血脈を集記す。

○九年四月長生殿内道場を罷む。

開成 八三六―八四〇

○三年七月日本僧圓仁、圓載楊州に至る。既にして圓仁全雅に就いて念誦法門並びに胎金兩部曼荼羅、諸壇様等を受く。

○八月日本僧常曉淮南に至り、慧運温州に至る。既にして常曉花林寺元照に大元帥祕法を受け、十二月栖靈寺に於いて密教を文際を受く。

○十二月日本僧圓行長安に至る。

○四年正月常曉大元帥兩部曼荼羅諸尊を圖す。

○同月圓行青龍寺に入り、義眞に兩部大法を受け、閏正月傳法阿

闍梨位灌頂を受く。同月圓載等嵩山院全雅に就いて、金剛界諸尊儀軌等を寫す。

○二月常曉傳法阿闍梨位灌頂を受けて日本に還る。同月圓載等楊州開元寺を發して長安に入り、義眞に胎藏法を受く。

○この年圓行日本に還る。圓仁亦還らむごし、海難に遇ひて果さず。

○五年圓仁大興善寺元政に就いて金剛界大法を學び、五瓶灌頂を受け、金剛界大曼荼羅を圖寫す。

○開成中西域の沙門滿月唐に來りて梵夾を進め、陀羅尼集を重譯す。然れども先に集經あるを以て藏に入らず。

會昌 八四一―八四六

○元年圓仁青龍寺義眞に就いて、胎藏灌頂道場に入り、胎藏大曼荼羅を圖寫し、又畫工をして九佛頂像を圖寫せしめ、更に玄法



寺法全に胎藏儀軌を習ふ。

○五年八月勅して天下の佛寺四千六百所を毀ち、僧尼二十六萬五百人を還俗せしむ。

○この年圓仁長安を去る。

大中 八四七―八五九

○元年三月天下の佛寺を復す。

○この年六月慧運日本に還る。

○同年秋圓仁日本に還る。

○七年八月日本僧圓珍福州に至り、同州開元寺に於いて、中印度沙門般若怛羅に遇ひ、梵字を習ひ、兩部の印を受く。

○八年十一月圓珍越に在りて、弟子豐智と共に、胎藏舊圖様を寫す。

○九年二月圓珍蘇州に至り、圓載と會し、五月共に洛陽に入り、六

月長安青龍寺に至り、密教を法全に受け、胎藏圖像、五部心觀圖等を寫す。十月龍興寺に金剛界灌頂を受け、刀慶等をして、文德天皇御願大曼荼羅像を圖せしむ。十一月兩部大教阿闍梨位灌頂を法全に受け、又智慧輪に兩部大曼荼羅教祕旨を受く。十二月圓載と共に洛陽に至る。

○智慧輪は即ち西域の沙門般若斫羯羅なり。夙に灌頂を受けて阿闍梨と爲り、大中中大曼拏羅法を行じ、摩訶吠室囉末那儀軌を譯す。

○十二年六月圓珍台州より日本に還る。

咸通 八六〇―八七三

○三年九月日本僧宗叡及眞如親王明州に至り、十二月越州に至る。

○五年二月眞如親王洛陽に、宗叡五臺山に入る。五月親王長安に



至りて西明寺に止まり、圓載に遇ひ、十月入竺の勅許を得、淮南を経て廣州に至る。

○六年正月眞如親王廣州を發して印度に向ふ。後羅越國に薨ず。

○八月造立兩界血脈を集記す。

○七年宗叡明州を發して日本に還る。

乾符 八七四—八七九

○四年十月圓載日本に還らむとせし、海に溺れて寂す。

願以此功德廻向

積徳院對嶺日直居士

能持院法壽日德居士

冥福爲菩提資糧

### 密教發達流傳年表終

#### 補遺

第三頁第十二行の次に

○曇摩羅察は月支の人なり。西域を歴遊して燉煌に居り、大いに梵本婆羅門經を賣して洛陽に至る。武帝太始元年より懷帝永嘉二年まで經を譯す。

第十一頁第一行の次に

○曇摩蜜多是罽賓の人なり。元嘉元年蜀に入り、後建業に至り、虚空藏神呪經等を譯す。又迦毘羅神王の像形を傳畫す。後人これに則る。元嘉十九年七月卒す。春秋八十七。

第十一頁第四行の次に

○達摩摩提は西域の人なり。武帝永明八年十二月、觀世音懺悔除罪呪經を譯す。今傳はらず。この經の梵本は、法獻が宋の元徽三年于闐國に於いて得たる所なり。

第十一頁第十一行の末に

○これ等の梵本は、扶南國の沙門曼陀羅が、天監二年來り獻する所なり。

第十三頁第十三行の次に

○攘那跋陀羅は波頭摩國の人なり。周に來り、明帝二年五明論一卷を譯す。聲明、醫方明、工巧明の外、呪術論、符印論あり。今傳はらず。

○達摩流支は摩勒國の沙門なり。武帝天和四年、婆羅門天文二十卷を譯す。今傳はらず。

第二十一頁第十一行の末に

その譯經は沙門戰陀般若提婆及慧智等度語す。慧智の父は中印度の人なり。使して唐に來り、因りて慧智を生む。慧智天后の勅に依り、長年婆羅門僧の弟子と爲れり。



324

328



終

